東洋学研究　第40号抜刷（平成15年３月）

金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト

伊吹　敦

金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト

伊吹　敦

前　言

本稿は、金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』のテキストを初めて公刊するものである。「金剛藏菩薩註」と呼ばれる文獻には、外に『觀世音經讃』（北京本、雨51）があるが、いずれも初期の禪宗文獻と考えることができるものである。今回は、紙幅の關係で『金剛般若經註』のテキストの提示に止め、『觀世音經讃』のテキスト、ならびに「金剛藏菩薩註」全體にわたる「解題」については、別の機會を期することにした。

なお、この「金剛藏菩薩註」を初めとする北宗禪の註釋文獻については、著者は既に次のような論攷を公表しているので、合わせて參照して頂きたい。

「北宗禪の新資料－金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讃』と『金剛般若經註』について」（「禪文化研究所紀要」17、1991年）

「『心王經註』の成立について」（「印度學佛教學研究」42-1、1993年）

「北宗禪系の『法句經疏』について」（「東洋學研究」39、2002年）

凡　例

一、使用したテキストは以下のごとくである。

『金剛般若經註』

底　本：　敦煌研究院96號（經文朱書）：　甘肅藏敦煌文獻編委・甘肅人民出版社・甘肅省文物共編『甘肅藏敦煌文獻　第一卷』（甘肅人民出版社、1999年）所收影印

對校本：　スタイン2511號（注雙行。書寫の後、一部、寫誤を補正している）：東洋文庫所藏マイクロフィルム

ペリオ2216號（注雙行。書寫の後、一部、寫誤を補正している）：東洋文庫所藏マイクロフィルム

その他

『金剛般若波羅蜜經』（『金剛般若經』）：　大正藏第８卷所收本（No.235）

『維摩詰所説經』（『維摩經』）：　大正藏第14卷所收本（No.475）

『妙法蓮華經』（『法華經』）：　大正藏第９卷所收本（No.262）

『大方廣佛華嚴經』（『華嚴經』）：　大正藏第９卷所收本（No.279）

『大般涅槃經』(『涅槃經』)： 大正藏第12卷所收本（No.374）

『佛説法句經』： 大正藏第85卷所收本（No.2901）

『諸經要抄』： 大正藏第85卷所收本（No.2819）

『佛爲心王菩薩説頭陀經』(『心王經』)： 方廣錩主編『藏外佛教文獻 第一輯』(宗教文化出版社（北京)、1995年）所收本

『心王經註』： 同上

『般若心經疏』(慧淨撰)： 卍續藏1-41-3所收本

『觀世音經讚』： 寫本（北京本、雨51）に基づいて著者が校訂した校本（近刊、引用に附した漢數字は、この校訂テキストのものである）

『注觀世音經』(愚道撰)： 寫本（ペリオ3904號）

『法句經疏』： 寫本（ペリオ2192號）

『大乘無生方便門』： 鈴木大拙『禪思想史研究 第三』(岩波書店、1968年）所收本

『大乘五方便北宗』： 同上

『南陽和上頓教解脱禪門直了性壇語』(『壇語』)： 楊曾文編校『神會和尚禪話録』(中華書局（北京)、1996年）所收本

『南陽和尚問答雜徵義』： 同上

『金剛經解義』：『慧能研究』(大修館書店、1978年）所收本

「大照禪師塔銘」： 全唐文262

二、『金剛般若經』の經文は、對校本のみでなく、大正藏本の『金剛般若經』とも對校して、文字の相違を註記した。

三、できるだけ細かい點まで註記をするよう心がけたが、「着」と「著」、「脩」と「修」、「況」と「况」、「萬」と「万」、「號」と「号」、「閉」と「閇」、「場」と「塲」、「寶」と「寳」、「猿」と「藐」、「礙」と「导」などのように、異體字として扱いうるものについては、前者に統一し、註記を省略した(ただし、「慧」と「惠」、「遶」と「繞」、「障」と「鄣」については便宜的に區別した)。

校訂テキスト

金剛般若經　　金剛藏菩薩注

(1) 金剛般若波羅蜜經(1)

金剛般若能觀之名。波羅蜜者。絶緣之語。心所了處。竝悉名經。

(1)「經」の下、『金剛般若經』には、「姚秦天竺三藏鳩摩羅什譯」あり。

（2）如是

□[1]之言理。是之言實。行□[2]□[3]便行於萬行。證實相理。故言如是。

（1）「□」、底本、寫眞では判讀できず。しかし、文脈より見て、恐らくは「如」。
（2）「□□」、2字ほど寫眞では判讀できず。しかし、その最初の文字は、恐らく「人」であろう。
（3）「便」、寫眞では「使」のようにも見える。

（3）我聞。

無我之我。從理顯出。生於聞慧。光照無盡。故言我聞也。

（4）一時

一切煩惱。究竟不生。更不煩勞。行人之時。故言一時。

（5）佛在舍衞國

五陰精舍。清淨之處。悟無上菩提。名之爲佛。萬法開明。百靈扶衞。故言舍衞。身之爲國。國内無有貪欲瞋恚愚癡羅刹。唯大菩薩給侍如來也。

（6）祇樹

祇之言少。少有人能信此心道法門。生死業行爲樹。悟即菩提行即爲樹也。

（7）給孤

觀解相次。智智無間。故言給孤。

（8）獨園。

即是須達長者。行般若之人。是能觀之心。向[1]祇陀太子買園。即是所觀之境。向祇陀義[2]言。往問境。答言。設使布金遍地。我亦不與。境智交諍未定。前[3]心未了。後心決斷。見理明淨。名斷事人。園屬須達。祇陀取金。境智和會。不二而二。即起門樓。門樓者。空無相無作解脱門。如來出入。教化衆生故。三解脱門開。勸請如來轉法輪故。出生普賢諸行願故。樓者三也。

（1）以下、『涅槃經』巻三十に次のようにいうのを參照。
「時須達多白舍利弗大德。此大城外。何處有地。不近不遠。多饒泉池。有好林樹。花果鬱茂。清淨閑豫。我當於中。爲佛世尊。及比丘僧。造立精舍。舍利弗言。祇陀園林。不近不遠。清淨寂寞。多有泉池。樹木花果。隨時而有。此處最勝可安立精舍。時須達多聞是語已。即往祇陀大長者所。告祇陀言。我今欲爲無上法王造立僧坊。惟仁園地任中造立。吾今欲買。能見與不。祇陀答言。設以眞金。遍布其地。猶不相與。須達多言。善哉祇陀。林地屬我。汝便取金。祇陀答言。我園不賣。云何取金。須達多言。若意不了。當共往詣斷事人所。時二長者。即共俱往斷事者所。斷事者言。園屬須達。祇陀取金。須達長者。即時使人車馬載負隨集布地。一

日之中。唯五百步。金未周遍。祇陀言曰。長者。若悔隨意聽止。須達多言。吾不悔也。自念當出何藏金足。祇陀念言。如來法王。眞實無上。所説妙法。清淨無染。故使斯人輕寶乃爾。即語須達。餘未遍者。不復須金。請以見與。我自爲佛造立門樓。常使如來經由出入。祇陀長者。自造門樓。須達長者。七日之中。成立大房。足三百口。禪房靜處。六十三所。冬室夏堂。各各別異。廚房浴室。洗脚之處。大小圂厠。無不備足。」(541上～中)

(2)「義」、恐らくは「議」の誤。

(3) この「前心－後心」と似た表現は、『金剛般若經註』には外にもしばしば見ることができる。即ち、(84) (115) (122) では「前心－後念」が、(105) (108) では「前念－後念」が用いられている。なお、「前念－後念」は、『心王經註』にも「前念猶淺。後念轉深。深相平等。名爲具足也」(268頁) と見ることができる。

(9) 與大比丘衆

與之言用。大之言遍。遍解開發。(1)比丘者。因中行三行。一者。破惡。三毒最惡。二者。怖魔。三者。萬行之乞士。一者。先列破三毒。二者。怖魔。魔之言相。因相行行。因行生解。(2)來導相。一切皆是眞實之相。三者。乞士。行於萬行。眞實之相。得沙門果。果中圓三德。一者。愛與無明。畢竟不生之德。二者。殺六塵賊。成六度之德。三者。(3)與實相應。名應供之德。

(1)「比丘者」以下の註については、『觀世音經讚』(八) にパラレルな記述を見ることができるので、そちらも參照されたい。

(2)「來導相」、意味が明確ではない。『觀世音經讚』(八) では、この部分が「解成道相」になっている。

(3) ここに見るような「與－相應」という表現は、(75) (79) (142) (165) の「與波若相應」、(123) (150) の「與理相應」、(66) の「與實相相應」、(124) の「與大乘心相應」などに見るように『金剛般若經註』にはしばしば見えるものである。また、『觀世音經讚』(十六) に「與法性相應」といい、『法句經疏』に「優婆夷。内曰。夷者平也。堅持戒行。行無高下。諸見平夷。與理相應。故曰優婆夷」(寶明菩薩問字品第一) というのも參照。

(10) 千二百五十人俱。

千者。千法明門。二者。結因果。五十者。(1)五陰清淨。一陰一十。故言五十人常與道俱。

(1)「五陰清淨」という言葉は、『觀世音經讚』(八) に「優婆塞者。閉塞一切諸放逸門。而生五道。五陰清淨。以現其身。故曰。優婆夷」と見える。

(11) 爾時。世尊。

爾時者。靜亂常寂。故言爾時。世尊者。唯吾一人。獨及其源。道尊德貴。故稱世尊。

(12) 食時着衣

中道正觀之食。資法身養慧命。故言食時。着衣者。柔和忍辱衣。遮六塵之惡賊。以觀智之利刀。割截五陰不生。名五條衣。割截七有漏。成七無漏忍。忍之言智。智即爲衣。斷諸煩惱。(1)内外清淨。割截九品煩惱。九品之智。智之言忍。故名福田之大衣也。

（1）「内外清淨」という言葉は、(55) にも見ることができ、『觀世音經讚』（八）にも「脩惠。煩惱賊不起。内外清淨」とある。

(13) 持鉢。

解行相隨。名爲持鉢。四天王奉鉢者。四心名四天王。四心既空。合爲一鉢。空能容受。受菩提果。故言奉鉢。

(14) 入舍衛

入五陰舍。次第遊觀心道經行之處。

(15) 大城乞食。

行人乞無漏食。長法身慧命。故言乞食也。

(16) 於其城中。次第乞已。

觀行之人。心心相次。無有聞(1)念。故言次第。

（1）「聞」、恐らくは「間」の誤。

(17) 還至本處

此是法性之家。息用還本。故言本處。

(18) 飯食訖(1)。

正觀之食既足。香積之飯豐盈。

（1）「訖」、底本は「乞」に作る。『金剛般若經』によって改めた。

(19) 收衣鉢

若不收衣鉢。恐愛染之心生。

(20) 洗足已。

行人行行好起分別。以無分別水。洗分別心。戒足清淨也。

(21) 敷座而坐。

敷演般若甚深義味。令衆生悟解。故言敷座。安(1)心不動。如須彌山。故言而坐。念動即魔網也。

（1）『觀世音經讚』（十九）にも「安心不動名坐」と、類似した表現を見ることができる。なお、

「安心不動」という言葉のみであれば、(79) にも見ることができる。

(22) 時長老須菩提。

正辯能觀人。學波若之利智也。

(23) 在大衆中。

行於萬行。得萬德之果。故言在大衆中。

(24) 即從座起。

察心不住。以不住故。住於諸法也。

(25) 偏袒右肩。

衆生偏着我人等病。行人(1)以空無我藥。除有我之病。病息藥除。右肩者。以方便力。堪任荷負三菩提擔也。

(1) ここに見るような薬の喩えは、『觀世音經讃』(四) にも「服無心之妙藥。定亂不生」と見える。

(26) 右膝着地。

從行人心地。出生法性之地。智慧無盡。

(27) 合掌

(1)掌之言心。心合於道。道合於心。

(1)『心王經註』に「掌之言了。了合於道。道合於心。故言合掌」(278頁)、『注觀世音經』に「合掌者。用志誠之心。合於正道。道合人心。心合於道也」とあるのを參照。

(28) 恭敬

(1)順實相理名恭。(2)妄心不起名敬。

(1) ここと略ぼ同じ表現が (125) に「順理名恭。妄心不起名敬」と見える。
(2)「妄」、底本は「忘」に作るも寫誤と見て改めた。

(29) 而白佛言。

言是開示。行人心地。法門無盡。

(30) 希有世尊。

希之言少。少有人能言此身心即是佛身。

(31) 如來善護念諸菩薩。

善之言理。觀智不斷。故言護念諸菩薩。

(32) 善付囑諸菩薩。

前心付後。學心之人。心心相次。無雜念起。

(33) 世尊。善男子善(1)(2)女人。

集(3)理之智。智智無盡曰男。集(4)理之解。解(5)無窮曰女。

（1）「善」以下、S2511と對校。
（2）「女人」、S2511は破損。
（3）「集理之智智智無盡曰男集理之解解無窮曰女」、S2511は破損。
（4）「女」を「解」と結びつける解釋については、(116) に「集行名男。集解名女」とあるのを參照。
（5）「解」の後、恐らく「解」を脱す。

(34) 發阿耨多羅三藐三菩提心。

此乃是無(1)上菩提。道心行人。脩心脩(2)慧。證得此法(3)也。

（1）「無上菩」、S2511は破損。
（2）「脩慧證」、S2511は破損。
（3）「法」、S2511は破損。

(35) 應云何住。

如(1)法性住。行人之心。以無住住。

（1）「如法性住行人之心以無住住」、S2511になし。

(36) 云何降伏其心。

衆生心性。躁動不停。心去疾於猛風。亂念多於草木。難可調伏。

(37) 佛言。善哉善哉。

善之言理。哉之言深。深得我意。

(38) 須菩提。如汝所説。

行人自悟。智從境生。故言如汝所説(1)。

（1）「説」の下、S2511には「也」あり。

(39) 如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。

念之言心。心心數法。皆從道生。故言念諸菩薩。囑之言累。無量惑(1)累。究竟不生。故言囑諸菩薩(2)。

（1）「惑」、底本・S2511とも「或」に作るが、改めた。
（2）「薩」の下、S2511は「也」あり。

(40) 汝今諦聽。

諦之言實。聽(1)之言印。以印印心。心(2)地開明。菩提文現也。

（1）この解釋については、(76) に「受之言印。以印印心地」というのを參照。なお、「受之言印」という言葉は (92) にも見えている。
（2）『觀世音經讚』（十六）に「意之言心。心地明白」とあるのを參照。

(41) 當爲汝説。善男子善女人。

正智名(1)男。解心非一名子。女(2)是定心。出生智惠無盡(3)。

（1）「名」、底本・S2511とも「多」に作るが、字形の類似による寫誤と見て改めた。
（2）『金剛般若經註』には、外にも「女是數數習觀。生七無漏智實也」(88)、「數數習觀。發無生智曰女」(129) のように類似した表現を見ることができる。また、『觀世音經讚』（十）に「童女者。是女能生智惠」というのも參照。
（3）「盡」の下、S2511は「也」あり。

(42) 發阿耨多羅三藐三菩提心。應如是住。如是降伏其心。

依於如如。不依佛國。應如是住。如(1)是二心。先心難伏。若能降(2)心。便成正覺。

（1）『涅槃經』「迦葉菩薩品」に「發心畢竟二不別。如是二心先心難。自未得度先度他。是故我禮初發心。初發已爲人天師。勝出聲聞及緣覺」(590上) とあるのによる語。『觀世音經讚』（三）にも「如是二心□□□」とあり、また、荷澤神會の『壇語』にも、この偈は引用されている（14頁）。
（2）「降」の下、S2511は「伏」あり。

(43) 唯然。世尊。願樂欲聞。

願是無着之名。能成無着之智。智惠無盡也(1)。

（1）「也」、S2511になし。

(44) 佛告

告(1)之言發。發之言開。開(2)方便門。示眞實相也。

（1）『心王經註』に「告之言發。發開生死心。見法身相」とあるのを參照。なお、『金剛般若經註』にも (164) に「説之言開。開之言解。心開意解」という解釋がある。
（2）『法華經』「法師品第十」に「此經開方便門。示眞實相。是法華經藏。深固幽遠。無人能到。今佛教化成就菩薩。而爲開示。」(31下) とあるのによる語。この語は、『觀世音經讚』（十九）にも「普之言開。門之言開。開方便門。示眞實相」と見える。この語は、『大乘無生方便門』(181頁) や『大乘五方便北宗』(200頁、218頁)、普寂の「大照禪師塔銘」などにも見え、初

期の禪宗で重んじられたことが知られる。

(45) 須菩提。諸菩薩摩訶薩。

此是行人進解。(1)轉緣易觀。道心明淨。心心皆從道生。名諸菩薩。節級戒訶。慧解發。名摩訶(2)薩。

（1）「轉緣易觀」は、(79) にも「轉緣易觀。觀道漸明。名斯陀含」と見える。
（2）「薩」の下、S2511は「也」あり。

(46) 應如是降伏其心。所有一切衆生之類。若卵生。若胎生。若濕生。若化生。

無明爲卵。五陰和合爲胎。愛潤爲濕。識心從衆緣生。不知從何而來。名之爲化。(1)悟解名佛。不悟六道受生。

（1）「悟」、底本・S2511とも「怡」に作るが、字形の類似による寫誤と見て改めた。

(47) 若有色。若無色。

色身名爲色。故言若有色。(1)行人觀色。色性自空。非色滅空。故言若無(2)色。

（1）慧淨撰とされる『般若心經疏』に「菩薩了達。色性自空。非色滅空」(208ｂ）とあるのを參照。
（2）「色」の下、S2511は「也」あり。

(48) 若有想。若無想。

行人無想之想。故言若有想。十方諸佛。不見於心。(1)於心(2)無心即無想。

（1）「於心」、S2511になし。
（2）「無心」という概念は、例えば（135）に「菩薩是能觀之智。煩惱是所觀之境。緣觀俱盡。可謂無心。故言無有法名爲菩薩也」と言うように、『金剛般若經註』には、しばしば見えるものである。これについては、(95)（136）（156）も參照。また、『觀世音經讚』（四）にも「服無心之妙藥。定亂不生」とある。

(49) 若非有想。

非是常見之想。斯乃眞實之想。

(50) (1)若非無想。

非是斷見之想。乃是性淨之想。

（1）「若」、『金剛般若經』になし。

(51) 我皆令入無餘涅槃

無煩惱習氣(1)之餘。涅(2)(1)之言色。槃(1)之言心。色心清淨。故曰無餘。

（1）「之」、底本は、いずれも「云」字のごとし。

（2）この解釋については、(64) に「章之言色。句之言心。色心。色心本來寂滅也」というのを參照。このような「心」と「色」とによる敍述は、『大乘無生方便門』には、しばしば見えるものである。二三例を擧げれば、以下の通りである。

「身心得離念。不見心心如。心得解脱。不見身色如。身解脱。如是長時無斷用。」(169頁)

「心不起心眞如。色不起色眞如。心眞如故。心解脱。色眞如故。色解脱。心色俱離。即無一物。是大菩提樹。」(170頁)

「離心心如。離色色如。心色俱如。即是覺滿。覺滿即是如來。又意根不起心如。五根不起色如。心色如如。不隨境起。即是如來平等法身。於此法身。説名本覺。覺心初起。心無初相。遠離微細念。了見心性。性常住。名究竟[覺]。是法身。」(171頁)

「心不思。口不議。心不思心如。心離繫縛。心得解脱。口不議色如。色離繫縛。色得解脱。心色俱離繫縛。是名不可思議解脱。」(185頁)

なお、「色心」と類似した表現に「身心」があるが、こちらは『金剛般若經註』では遙かに頻繁に用いられており、(30) (69) (70) (75) (102) (108) (118) (130) (145) (146) (157) (161) に見ることができる。

(52) 而滅度之。如是滅度無量無數無邊衆生。實無衆生得滅度者。

煩(1)惱衆生。性本自離(2)。故言實無衆生得滅度者。

（1）これは「煩惱にまみれた衆生」の意味ではなく、「煩惱がそのまま衆生である」の意。(110) に「行人求煩惱衆生。畢竟不可得」、(131) に「煩惱名衆生」というのを參照。「衆生」を「煩惱」と解し、悟りを開くことを「度衆生」と解するのは、「金剛藏菩薩註」にしばしば見られるものであり、『觀世音經讚』(十四) にも「心生智惠。覺悟貪欲嗔恚妄想顚倒不生。名爲常度衆生」という文章がある。なお、こうした解釋は『大乘五方便北宗』や『心王經註』にも次のように見ることができる。

「妄念是衆生。身心不動。是名度衆生。」(『大乘五方便北宗』194頁)

「有力度衆生。[問。]云何是衆生。答。一切動念生滅妄想顚倒計度。竝是衆生。[問。]云何度衆生。[答。]爲無相實相不間斷。是度衆生。」(同上、213頁)

「煩惱名衆生。悟解即是佛。故言出生諸佛。」(『心王經註』280頁)

「煩惱是衆生。清淨是法。故言法度衆生也。」(同上、284頁)

（2）「離」、底本・S2511とも「雜」に作るが、字形の類似による寫誤と見て改めた。(151) に「煩惱衆生。自性本離」とあるのも參照せよ。

(53) 何以故。須菩提。

行人悟心(1)轉勝。深妙難(2)測。不見空與不空。名菩(3)薩。

（1）「轉勝」は、「轉深」や「轉明」(101)、「轉妙」(150) などと合わせ考えるべきものである。「轉深」については、(84) の註（2）を參照。

（2）「測」、S2511は「側」に作る。

（3）「薩」の下、S2511は「也」あり。

(54) 若菩薩有我相人相衆生相壽者相。即非菩薩。

我見坑深。深而難伏。以自性空。空我見山。見山既傾。三見自滅。故名眞實菩薩也。

(55) 復次須菩提。菩薩於法。應無所住行於布施。所謂不住色布施。不住聲香味觸法布施。

行人先須次第行六波羅蜜。滿薩婆若故。外不住六塵。内不住六根。中間不住六識。内外[1]清淨。十八空[2]法。開門大施。

（1）「内外清淨」については、(12) の註（1）を參照。

（2）「十八空」という言葉は、下の (57) にも見える。普通、「十八空」といえば、『大品般若經』の序品等で説かれる、内空、外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空のことであるが、ここでは、十八界の空のことと解している。これは、(97) や (159) に見るように、當時、十八界の空を觀ずる觀法が實際に行われていたからであり、『心王經註』にも、例えば次のような文章がある。

「普照一切者。謂陰入界一切法。陰者五陰。色受想行識是。入者十二入。内有六根。眼耳鼻舌身意。外有六塵。爲色聲香味觸法。名十二入。界者中間。六識六根六塵。即是十八界。是以五陰十二入十八界是一切。行人觀之。空無所有。名之曰照。故云普照一切也。」(258-259頁)

なお、ここと類似した例としては、『大乘五方便北宗』に「十八不共法」を同樣に解した次のような文章がある。

「云何開閉一切惡趣門。十八不共法。答。眼耳鼻舌身意。内有六根。外有六塵。中間六識。三六十八界。六根不起。六道不生。六道不生。即是開閉一切惡趣門。常住於彼無爲安樂。」(215頁)

(56) 須菩提。菩薩應如是布施。不住於相。何以故。若菩薩不住相布施。其福德不可思量。

深住即生死輪迴。不住不着即應般[1]若。故言不可思量。

（1）「般」、S2511は「波」に作る。

(57) 須菩提。於意云何。東方虛空可思量不。不也。世尊。

擧行人初入觀。了了證十[1]八空。空慧日光。名東方虛空。初發智之始也。

（1）「十八空」については、(55) の註（2）を參照。

(58) 須菩提。南西北方。四維上下虛空。可思量不。不也。世尊。須菩提。菩薩無住相布施福德。亦復如是。不可思量。

世間財施福德。莊嚴色身。法施福德。莊嚴法身。福德智慧。此二法中。無所着。念念成道。故言不可思量者也。

(59) 須菩提。菩薩但應如所教住。

教是悟解之語。心無所住。住無所住。故言教住。

(60) 須菩提。於意云何。可以身相見如來不。不也。世尊。不可以身相得見如來。何以故。如來所説身相即非身相。

非身爲身。非相爲相。豈是相心見如來乎。十方諸佛。不見於心。名之爲佛。無所見故。名爲見佛也。

(61) 佛告須菩提。

行人自悟聖(1)心。無凡夫心。得實相心。

(1)「聖心」という言葉は、(105) で再び使われている。

(62) 凡所有相皆是虚妄。

若偏(1)心起煩惱。煩惱還自縛。故言皆是虚妄(2)。

(1)「偏心」と類似した表現としては、外に (65) (140) の「偏念」、(75) (124) の「偏觀」などがある。いずれも否定的な意味で使われている。
(2)「妄」の下、S2511は「也」あり。

(63) 若見諸相非相即(1)見如來。

轉(2)念即悟。只此妄想。即是非相。即見如來。來(3)之言會。

(1)「即」、『金剛般若經』は「則」に作る。
(2)「轉念」という言葉は、(118) にも「轉念即坐道場也」と見える。
(3)『心王經註』に「來之言會。煩惱交會。共造一心。故言大衆」(260頁)、「如者不動。來者會也。會合無生。是如來家也」(295頁) などというのを參照。

(64) 須菩提白佛言。世尊頗有衆生得聞如是言説章句。生實信不。

章(1)之言色。句之言心。色心。色心本來(2)寂滅也。生實信不者。以信能入生死大海。接引衆生(3)。到涅槃也。

(1) この解釋については、(51) の註 (2) を參照。
(2)「來」、底本・S2511とも「未」に作るが、字形の類似による寫誤と見て改めた。
(3)「生」、底本になし。明らかな寫誤であるから、S2511によって補った。

(65) 佛告須菩提。莫作是説。如來滅後。後五百歲。

行人偏(1)念五蔭(2)。一陰一百。合爲五百。名佛滅度。

(1)「偏念」については、(62) の註 (1) を參照。
(2)「蔭」、S2511は「陰」に作る。

(66) 有持戒脩福者。於此章句。能生信心。以此爲實。

持心不起。即是如來常住於世。心(1)戒清淨。生無量智。智惠具足。念念與(2)實相相應。以此

爲實者。此乃自證。不由他。寂滅無戲論。無分別是即爲實相。

（1）「心戒」については、『大乘無生方便門』に「菩薩戒是持心戒。以佛性爲戒性。心瞥起。即違佛性。是破菩薩戒。護持心不起。即順佛性。是持菩薩戒。」（168頁）というのを參照。
（2）「與－相應」については、（9）の註（3）を參照。

(67) 當知。是人不於一佛二佛三四五佛而種善根。

二一不一而一[(1)]。名爲一佛。三二不二而二。名爲二佛。四三不三而三。名爲三佛。五四不四而四。名爲四佛。六五不五而五。名爲五佛也。而種善根者。法性無盡。無盡深根。而心心數法。從法性生。心心皆是佛。

（1）「一」、底本・S2511ともになし。寫誤による脱落と見て補った。

(68) 已於無量千萬佛所。種諸善根。

千種無盡深妙[(1)]法門。萬是萬行。成萬德之果。故言千萬佛也[(2)]。

（1）「妙」、S2511になし。
（2）「也」、S2511になし。

(69) 聞是章句。乃至一念生淨信者。

信爲能入。入之言解。解己身心。本來清淨。即是如來也。

(70) 須菩提。如來悉知悉見。是諸衆生得如是無量福德。

悉知。知之言解。解己身心。心[(1)]無來去。故曰如來。悉[(2)]見[(3)]之言證。證實相理。了達煩惱。解惠福德。種種法門。皆無盡[(4)]。

（1）「心」、恐らくは「本」の誤。
（2）「悉」の下、恐らく「見」を脱す。
（3）S2511は、初めに「知」と書いて、それを後に「見」に改めている。
（4）「盡」の下、S2511は「也」あり。

(71) 何以故。是諸衆生。無復我相人相衆生相壽者相。無法相。亦無非法相。何以故。是諸衆生。若心取相。則爲着我人衆生壽者。若取法相。即着我人衆生壽者。何以故。若取非法相。即着我人衆生壽者。是故不應取法。不應取非法。

一切衆生相。即諸法實相。若取衆生相。即遠於實相。法相尚不可取。何況非法而當可住。

(72) 以是義故。如來常説。汝等比丘。知我説法如筏喩者。法尚應捨。何況非法。

行人常爲六塵惡賊所害。欲度煩惱大河。起大方便。取草爲筏。身倚其上。運手動足。載流而去(1)。若得度河。筏不可依。依即住着。無住無着。行於般(2)若。

（1）「去」、底本・S2511とも「法」に作るが、寫誤と見て改めた。なお、(85) の註（4）も參照。
（2）「般」、S2511は「衆」に作る。

(73) 須菩提。於意云何。如來得(1)阿耨多羅三藐三菩提(2)耶。如來有所説法耶。須菩提言。如我解佛所説義。無有定法名阿耨多羅三藐三菩提。亦無有定(3)法如來可説。何以故。如來所説法。皆不可取。不可説。非法非非法。

設有一法過涅槃者。我亦説如幻如夢。故言不可取。取即愛染。

（1）「得」の下、S2511は「得」あり。
（2）「提」、S2511になし。
（3）「法」、S2511になし。

(74) 所以者何。一切賢聖皆以無爲法而有差別。

凡聖本來不一不異。無差別説。而衆生着差別。失正道。悟心之人。知一切衆生皆是無爲。無(1)爲即道。道即是佛。衆生不肯自認己身是佛。經(2)言。苦哉苦哉。佛道衆生不信不入。知復奈何(3)。

（1）「無爲即道」、(121) に「斯及無爲大道」というのを參照。
（2）出典未詳。
（3）「何」、底本は「河」。恐らくは寫誤。S2511によって改めた。

(75) 須菩提。於意云何。若人滿三千大千世界七寶以用布施。是人所得福德寧爲多不。須菩提言。甚多。世尊。何以故。是福德即非福(1)德性。是故。如來説福德多。

行人偏(2)觀。有所得心。三千三毒。大千等分。世(3)是五陰。界是十八界。雖布施不與(4)波若相應。不合身心也。

（1）「福德」、『金剛般若經』は「復福」に作る。大正藏本の誤植である。
（2）「偏觀」については、(62) の註（1）を參照。
（3）『大乘無生方便門』に次のようにいうのを參照。
「問。是沒是出現於世。[答。]五蘊爲世。了空即出現於世。如來王宮生。雙樹滅。即是出現於世。」(184頁)
（4）「與－相應」については、(9) の註（3）を參照。

(76) 若復有人。於此經中。受持乃至四句偈等。爲他人説。

受(1)之言印。以印印心地。自然清淨。持之言進。進解法相。無我人衆生壽者。名爲四句。爲八字名偈。菩薩息心清淨。名爲自利。不爲六塵所傷。名爲利他。亦名爲他説(2)。

（1）この解釋については、(40) に「聽之言印。以印印心」とあるのを參照。
（2）「説」の下、S2511は「也」あり。

(77) 其福勝彼。何以故。須菩提[(1)]。一切諸佛及諸[(2)]佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出[(3)]。

經[(4)]之言心。發菩提心。出生法性。以性昭了。無非是法。故言皆從此經出。

（1）「菩」以下、P2216と對校。
（2）「諸佛阿耨多羅三藐三」、P2216は破損。
（3）「出」、P2216は破損。
（4）『諸經要抄』にこの部分の經文を掲げているが、そこに附された註にも「此經者。即此心」とある（1197上）。なお、P2216は破損のために「經之言心發菩提心出生法性以性昭了無非是法故言皆從此經出」を缺いている。

(78) 須[(1)]菩提。所謂佛法者。即[(2)]非佛法。

行人體悟非佛法。非非佛法。乃名眞法。

（1）「須」、P2216は破損。
（2）「即非佛」、P2216に破損。

(79) 須菩提。於意云何。須陀洹能作是念。我得須陀洹果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。須陀洹名爲入流。而無所入。不入色聲香味觸法。是名須陀洹。須菩提。於意云何。斯陀含能作是念。我得斯陀含果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。斯陀含名一往來。而實無往來。是名斯陀含。須菩提。於意云何。阿那含能作是念。我得阿那含果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。阿那含名爲不來。而實無來。是故名阿那含[(1)]。須菩提。於意云何。阿羅漢能作是念。我得阿羅漢道不。須菩提言。不也。世尊。何以故。實無有法名阿羅漢。世尊。若阿羅漢作是念。我得阿羅漢道。即爲着我人衆生壽者。

昔小乘教。斷見思二輪煩惱盡。名阿羅漢。此中明大乘須陀洹。心心與[(2)]波若相應。不斷煩惱。而入道流。轉[(3)]緣易觀。觀[(4)]道漸明。名斯陀含。一往入觀。悟解心明。安[(5)]心不動。故無往來。行不住道。名阿那含。是字不住。亦不不住。名阿羅漢。波若是一法。佛説種種名。隨諸衆生力。爲之立異字。阿羅漢是外國語。此云無着之智。

（1）「含」、S2511になし。
（2）「與－相應」については、（9）の註（3）を參照。
（3）「轉緣易觀」は、(45) にも「轉緣易觀。道心明淨。心心皆從道生。名諸菩薩」と見える。
（4）「觀道漸明」と類似した表現としては、(101) に「觀智轉明」とある。
（5）「安心不動」は (21) にも見えている。

(80) 世尊。佛説我得無諍三昧。人中最爲第一。

煩[1]惱即菩提。不與煩惱諍。名無諍。三昧外國語。此云調直。定心無邪曲。直[2]心爲道場。言第[3]一。

（1）『法句經』の品題として、「煩惱即菩提品第九」（1434中）がある。また、この「煩惱即菩提」という語は、荷澤神會がしばしば用いたものであり、例えば『壇語』に次のようにいう。

「爲知識聊簡煩惱即菩提義。擧虚空爲喩。如虚空本無動靜。明來是明家空。暗來是暗家空。暗空不異明。明空不異暗。虚空明暗自來去。虚空本來無動靜。煩惱與菩提。其義亦然。迷悟別有殊。菩提性元不異。」（11頁）

（2）『維摩經』「菩薩品第四」に「直心是道場。無虚假故」（543下）とあるのによる語。『觀世音經讃』（十九）にも「道場者。直心是」と見える。

（3）「一」の下、P2216は「也」あり。

(81) 是第一離欲阿羅漢。我不作是念。我是離欲阿羅漢。世尊。我若作是念。我得阿羅漢道。世尊則不説。須菩提是樂阿蘭那行者。以須菩提實無所行。而名須菩提是樂阿蘭那行。

阿之言無。無雜念生。蘭之言靜。靜[1]亂不起。那[2]言解脱。具足無爲智惠無盡。須菩提是觀行之人。故言樂阿蘭那行[3]。

（1）「靜」、S2511になし。

（2）「那」の下、S2511・P2216は「之」あり。

（3）「行」の下、P2216は「也」あり。

(82) 佛告須菩提。於意云何。如來昔在燃[1]燈佛所。於法有所得不。世尊。如來[2]在燃[3]燈佛所。於法實無所得。

然燈佛是釋迦師。行[4]光佛亦是釋迦師。行人入定。因定發智。智慧[5]光明。光無形相。故言無所得也。

（1）「燃」、『金剛般若經』は「然」に作る。

（2）「來」の下、S2511は「昔」あり。

（3）「燃」、『金剛般若經』、竝びにP2216は「然」に作る。

（4）「行」、P2216は「定」に作る。

（5）「慧」、P2216は「惠」に作る。

(83) 須菩提。於意云何。菩薩莊嚴佛土不。不也。世尊。何以故。莊嚴佛土者則非莊嚴。是名莊嚴。

佛是悟道之人。智惠高顯。土[1]之言心。心淨莊嚴。波若莊嚴心。法相無盡。故言則非莊嚴是名莊嚴。

（1）「土之言心」という表現は、(142) にも見ることができる。

(84) 是故。須菩提。諸菩薩摩訶薩。應如是生清淨心。

前[1]心悟解猶淺。名爲菩薩。後[1]念轉[2]深。名摩訶薩。

（1）「前心－後念」については、（8）の註（3）を參照。
（2）「轉深」という言葉は、(90)（128）（156）（162）に見るように、『金剛般若經註』ではしばしば見ることができるものである。『金剛般若經註』には、外にも類似した表現として、「轉明」(101)、「轉深轉妙」(150)、「轉勝」(53) などがある。なお、「轉深轉妙」は、『觀世音經讚』（十六）にも見えている。

(85) 不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應無所住而生其心。

於[1]眼根中入正受[2]。於色法中三昧起。示現色相不思議。一切天人莫能了。於色法中入正受。於眼起定念不亂。觀眼無生無自性。説空寂滅無所有。寂滅道場。光[3]明如來。來出現於世。爲度貪色衆生。乃至耳鼻舌身意。竝是解脱門。無所從來門。亦無所去[4]門。何以故。六自在王。性清淨故也[5]。

（1）『華嚴經』卷七「賢首菩薩品第八之二」に「於眼根中入正受。於色法中三昧起。示現色法不思議。一切天人莫能知。於色法中入正受。於眼起定念不亂。觀眼無生無自性。説空寂滅無所有」（438下）とあるのに基づく。この言葉は、初期の禪宗で重んじられたようで、『大乘五方便北宗』にも次のような文章がある。

「於眼根中入正受。於色塵中三昧起。示現色性不思議。諸天世人莫能知。於色塵中入正受。於眼根三昧起。示現色法不思[議]。諸天世人莫能知。耳鼻舌身意。竝如上解。於眼根中入正受。知眼於色起。定心不亂。知眼無生無自性。了空寂滅無所有。東西南北。地獄餓鬼人天。凡聖男女。有情無情。一身多身。一法多法。竝如上解。」（210頁）

（2）「受」、底本・S2511は「愛」に作る。明らかな寫誤であり、P2216によって改めた。
（3）「光」、P2216は「無」に作る。
（4）「去」、S2511は「法」に作る。P2216は初めに「法」と書いて、後に「さんずい」の部分を消しているようである。
（5）「也」、P2216になし。

(86) 須菩提。譬如有人身如須彌山王。於意云何。是身爲大不。須菩提言。甚大。世尊。何以故。佛説非身是名大身。

衆生起於我見。如須彌山。佛説者。佛是悟理之人。以非身爲身。此乃法性之大身[1]也。

（1）「也」、P2216になし。

(87) 須菩提。如恆河中所[1]有沙數。如是沙等恆河。於意云何。是諸恆河沙。寧爲多不。須菩提言。甚多。世尊。但諸恆河尚多無數。何況其沙。

識潤流注名河。生長煩惱。微細難知。諸大菩薩。了了知之。恆之言愛。愛水流注。尚多無數。何況微細煩惱可數知耶。

（1）『金剛般若經』は「所」に作る。大正藏本の誤植である。

(88) 須菩提。我今實言告汝。若有善男子善女人。

習理之智名男。心心悟解曰女。女(1)是數數習觀。生七無漏智實(2)也。

（1）これと類似した表現は外にも見える。(41) の註（2）を參照。
（2）S2511は、「也」なし。

(89) 以七寶滿爾所恆河沙數三千大千世界。以用布施。得福多不。須菩提言。甚多。世尊。

此中格量行人。用心深淺。意欲使脩道之人。勞強精進。不生退轉。有所得心行施。取恆河中一沙。滿三千大千世界。以用布施。福報雖多。而有窮盡。有所得施。無有道果者(1)。

（1）「者」の下、S2511は「也」あり。

(90) 佛告須菩提。若善男子善女人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人説。而此福德勝前福德。

觀解轉(1)深。合應波若。於此經中。中者中實之理。理無生死老病。故云四句。内智自明。即是自利。後心受(2)化。故言爲他説(3)也。

（1）『金剛般若經註』に「轉深」という言葉がしばしば現われることについては、(84) の註（2）を參照。
（2）「受」、S2511は「愛」に作る。なお、これについては、(85) の註（2）も參照。
（3）「也」、P2216になし。

(91) 復次。須菩提。隨説是經。乃至四句偈等。當知。此處一切世間天人阿脩羅。皆應供養如佛塔廟。

學道之人。深達實相。安心空寂。性體昭明。五陰名世間。五陰無性。即出世間。阿脩羅不飲五欲無明之酒。心淨名供養。自證實相。故言如佛塔(1)也。

（1）「也」、P2216になし。

(92) 何況有人盡能受持讀誦。須菩提。當知。是人成就最上第一希有之法。若是經典所在之處。則爲有佛若尊重弟子。

受(1)之言印。持之言進。進行進解。故言受持。讀之言能。能觀之心。緣所觀之境。境能融心。發智曰誦。因無所行。無所不(2)行。果無所得。無所不得。故言成就(3)。

（1）「受之言印」については、(40) の註（1）を參照。
（2）「不」、底本・S2511・P2216ともになし。文脈より見て明らかな脱落なので補った。なお、(149) に「斯乃是心無所行。無所不行」、(153) に「無所見。無所不見」とあるのも參照。
（3）「就」、底本・S2511・P2216ともに「我」に作るが、字形の類似による寫誤と考えられるから改めた。また、S2511は、「就」の下に「也」あり。

(93) 爾時。須菩提白佛言。世尊。當何名此經。我等云何奉(1)持。佛告須菩提。是經名爲金剛般若波羅蜜。以是名字。汝當奉持。

行人心地猛利。猶如剛刀決斷。生死即是涅槃。同法性等虛空。故言汝當奉持也(2)。

（1）「奉」、P2216に「受」に作る。
（2）「也」、P2216になし。

(94) 所以者何。須菩提。佛説。般若波羅蜜則非般若波羅蜜。

般之言心。若之言智。無所從來。亦無所去。於一切處。求之不得。故言即非波(1)若(2)。

（1）「波」、P2216は「般」に作る。
（2）「若」の下、S2511は「也」あり。

(95) 須菩提。於意云何。如來有所説法不。須菩提白佛言。世尊。如來無所説。

如摩尼珠。無(1)心思量。而能雨一切萬物。故言無所説(2)。

（1）「無心」については、(48) の註（2）を參照。
（2）「説」の下、S2511は「也」あり。

(96) 須菩提。於意云何。三千大千世界所有微塵。是爲多不。須菩提言。甚多。世尊。須菩提。諸微塵。如來説非微塵。是名微塵。

三毒等分。名三千。大千世界。爲微塵所成。經(1)云。一切土地。是我先身。非餘微塵。是實相微塵。菩薩由此成正覺(2)。

（1）出典未詳。
（2）「覺」の下、P2216は「也」あり。

(97) 如來説。世界非世界。是名世界。

前觀身爲微塵所成。今(1)觀十八界空。求我人相不可得。故言非世界。不壞假名。而説諸法實相。故言是名世界者(2)。

（1）「十八界」を「空」と觀ずる觀法については、(55) の註（2）を參照。
（2）「者」、或いは衍字か。

(98) 須菩提。於意云何。可以三十二相見如來不。不也。世尊(1)。何以故。如來説。三十二相即是非相。是名三十二相。

心(2)莊嚴色。有三十二。色(2)莊嚴心。好好無盡。故言即是非相。非相説相。是名(3)三十二相也(4)。

（1）「尊」の下、『金剛般若經』には「不可以三十二相得見如來」あり。

（2）「心莊嚴色」「色莊嚴心」については、(136) に「心莊嚴色。色莊嚴心。無色無心。即非莊嚴。是名莊嚴」とあるのを參照。なお、「色」と「心」については、(51) の註（2）を參照。
（3）「名」、S2511になし。
（4）「也」、P2216になし。

(99) 須菩提。若有善男子善女人。以恆河沙等身命布施。

恆[1][2]沙煩惱。以爲身命。布[3]之言散。施[4]之言捨。捨諸所有。

（1）ここに見るような、「恆沙」を煩惱とする解釋は、次の (117) や (118) にも見られるが、既に『大乘無生方便門』にも「擲過恆河沙世界之外。恆河沙是煩惱。超過煩惱。即是擲過恆河沙世界之外」(188頁) と登場している。
（2）「沙」、P2216は「河」に作る。
（3）これと同じ表現は、(117) に「布之言散。散却愛染也」と見える。
（4）この表現は (118) にも見える。また、『心王經註』に「施言捨。捨離諸見。妄想不生。即是法」(267頁) というのも參照。

(100) 若復有人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人説。其福甚多。爾時。須菩提聞説是經。深解義趣。涕淚悲泣

法相流布。慈潤衆生。故言涕淚也。悲泣者。悲[1][2]憙交流。悲昔迷心流浪生死。喜[3]今得悟即是如來。故言深解義趣[4]。

（1）「悲」、底本・S2511・P2216ともに「悲悲」に作るも改む。
（2）「憙」、S2511・P2216は「喜」に作る。
（3）「喜」、P2216は「憙」に作る。
（4）「趣」の下、S2511は「也」あり。

(101) 而白佛言。希有。世尊。佛説如是甚深經典。我從昔來所得慧眼。未曾得聞如是之經。

實相之理。名曰深經。觀智轉[1]明。名爲慧眼[2]。

（1）「轉明」という言葉は、諸處に使われている「轉深」や、(150) に見える「轉妙」、(53) に見える「轉勝」などと密接な關係を持つものと言える。なお、「轉深」については、(84) の註（2）を參照。また、これとは別に、(79) には、「漸明」という表現も見受けられる。
（2）「眼」の下、S2511は「也」あり。

(102) 世尊。若復有人得聞是經。信心清淨。則生實相。當知。是人成就第一希有功德。世尊。是實相者則是非相。是故[1]如來説名實相。

經[2]云。如自觀身實[3]相。觀佛亦然。實相之理。遍在身心。衆生自悟自得。非他授與也。

（1）「故」、S2511になし。
（2）『維摩經』「見阿閦佛品第十二」に「爾時世尊問維摩詰。汝欲見如來。爲以何等觀如來乎。維摩詰言。如自觀身實相。觀佛亦然。我觀如來」(554下-555上) とある。なお、この經文は、後に (144) で再び引用されている。
（3）「實相」、P2216は「相實」に作る。

(103) 世尊。我今得聞如是經典。信解受持不足爲難。

心無雜亂。體悟大乘。是乘不出三界。不住薩婆若。同眞如等法性。故言不足爲難也。

(104) 若當來世。後五百歲。其有衆生得聞是經。信[(1)]解受持。是人則爲第一希有。何以故。此人無我相人相衆生相壽者相。所以者何。我相即是非相。人相衆生相壽者相即是非相。何以故。離一切諸相則名諸佛。

心病眼花。妄見諸法。離之言空。空慧既明。心病自滅。故言則名諸佛也[(2)]。

（1）「信」、S2511は破損。
（2）「也」、P2216になし。

(105) 佛告須菩提。如是如是。

前[(1)]念後念。竝合聖[(2)]心。故言如是如是也[(3)]。

（1）「前念後念」については、（8）の註（3）を參照。
（2）「聖心」は、(61) に既出である。
（3）「也」、S2511になし。

(106) 若復有人。得聞是經。不驚不怖不畏。當知。是人甚爲希有。何以故。須菩提。如來説。第一波羅蜜非第一波羅蜜。是名第一波羅蜜。須菩提。忍辱波羅蜜。如來説非忍辱波羅蜜。

此歎行人常行波若爲君王。波若無所來。亦復無所去。衆生心亦爾。悟[(1)]即朝凡暮聖也。

（1）「悟」の下、P2216は「解」あり。

(107) 何以故。須菩提。如我昔爲歌利王割截身體。我於爾時。無我相。無人相。無衆生相。無壽者相。何以故。我於往昔節節支解時。若有我相人相衆生相壽者相。應生瞋恨。

歌利王即是行般若之人。以無生慧刀[(1)]。割[(2)]五陰舍宅。五住盤根。節節皆斷也[(3)]。

（1）「刀」、S2511は「力」に作る。
（2）「割」の下、P2216は「截」あり。
（3）「也」、S2511になし。

(108) 須菩提。又念過去。於五百世。作忍辱仙人。於爾所世。無我相[(1)]人相[(1)]衆生相[(1)]壽者相。是故。須菩提。菩薩應離一切相。發阿耨多羅三藐三菩提心。

前[(2)]念已經行忍。後[(2)]念重復調心。心地純熟。五陰名五百世。内智既明。煩惱不起。身[(3)]心清淨。名仙人也。

（1）「相」の下、いずれも『金剛般若經』には「無」あり。
（2）「前念－後念」については、（8）の註（3）を參照。
（3）「身心清淨」は、『觀世音經讚』（十九）にも「身心清淨。即坐道場」と見える。

(109) 不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應生無所住心。若心有住。則爲非住。是故。佛説。菩薩心不應住色布施。

六塵從心生。心既不生。萬法清淨。常行六度。證薩婆(1)若也(2)。

（1）「婆」、P2216は「波」に作る。
（2）「也」、S2511になし。

(110) 須菩提。菩薩爲利益一切衆生。應如是布施。如來説。一切諸相即是非相。又説。一切衆生則非衆生。

以相爲相。爲相所縛。行人求煩(1)惱衆生。畢竟不可得。故言又説一切衆生則非衆生(2)。

（1）「煩惱衆生」については、(52) の註（1）を參照。
（2）「生」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(111) 須菩提。如來是眞語者。實語者。如語者。不誑語者。不異語者。

五一不一。一五不五。名眞語者。文字喜(1)樂。令衆生悟解。故言眞語也。

（1）「喜」、S2511は「憙」に作る。

(112) 須菩提。如來所得法。此法無實無虚。

實虚不虚。虚實不實。不虚不實。行聖中道也(1)。

（1）「也」、P2216になし。

(113) 須菩提。若菩薩心住於法而行布施。如人入闇則無所見。

無明覆障(1)。生死輪迴。無有惠明。從闇入闇(2)。

（1）「障」、S2511・P2216は「鄣」に作る。
（2）「闇」の下、P2216は「也」あり。

(114) 若菩薩心不住法而行布施。如人有目。日光明照。見種種色。

心淨無異。惠眼開明。見種(1)種色。一(2)色一佛。無量色無量佛也。

（1）「種種」、S2511は「種」に作る。
（2）「一」の下、S2511は「心」あり。P2216も、一旦、「心」と書いたものの、後に消したようである。

(115) 須菩提。當來之世。若有善男子善女人。能於此經受持讀誦。則爲如

來。以佛智惠[1]。悉知是人。悉見是人。皆得成就無量無邊功德。

前[2]心行行合實相理。若當來者。只是後[2]念心心無間。速與[3]理應。故言以佛智惠悉知是人悉見是人[4]。

（1）「惠」、『金剛般若經』は「慧」に作る。
（2）「前心－後念」については、（8）の註（3）を參照。
（3）「與理應」、「與理相應」の意。「與理相應」は、(123)（150）に見える。
（4）「人」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(116) 須菩提。若有善男子善女人。

如水冷[1]相。飲者自知。非可言説。集行名男。集[2]解名女。解行相隨。至無上道也。

（1）「冷」、S2511は「今」に作る。
（2）この註釋については、(33）に「集理之解。解無窮曰女」とあるのを參照。

(117) 初日分[1]。以恆河沙等身布施。

日即心。心捨貪[2]欲。貪[3]欲煩惱。數如恆沙。布[4]之言散。散却愛染也。

（1）S2511は、「分」の下に「分」あり。
（2）「貪欲貪欲」、底本・S2511・P2216とも「貪貪欲欲」に作る。これは、「貪欲貪欲」を「貪々欲々」と略記していたものが、後に誤られたものと認められる。
（3）「貪欲煩惱。數如恆沙」については、(99）の註（1）を參照。
（4）「布」の下、S2511・P2216は「施」あり。なお、この一節については、(99）に「布之言散。散却愛染也」というのを參照。

(118) 中日分。復以恆河沙等身布施。後日分。亦以恆河沙等身布施。如是無量百千萬億劫以身布施。

狂癡[1]心起。數如恆[2]沙等身。施[3]之言捨。捨一切煩惱。即是檀波羅蜜。此釋超[4]過文字羅網。身心煩惱性淨。轉[5]念即[6]坐道場也。

（1）「恆沙」を「狂癡心」のような煩惱と結びつけることについては、(99）の註（1）を參照。
（2）「恆」の下、P2216は「河」あり。
（3）「施之言捨」という表現は（99）に既出である。(99）の註（4）を參照。
（4）「超」、底本・S2511・P2216とも「起」に作る。文脈より見て明らかに「超」の誤りであるから改めた。
（5）「轉念」という言葉は、(63）にも「轉念即悟」と見ることができる。
（6）「即坐道場」は、「金剛藏菩薩註」でしばしば用いられる表現であり、『金剛般若經註』では、外に（122）にも見え、『觀世音經讃』にも「身心清淨。即坐道場」（十九）とある。

(119) 若復有人聞此經典。信心不逆。其福勝彼。

福是無相之福最妙。故云勝彼三時。

(120) 何況書寫受持讀誦爲人解説。須菩提。以要言之。是經有不可思議不可稱量(1)無邊功德。

(2)觀心初發名書。任運不加功力名寫。

（1）「無」、S2511は「無無」に作る。
（2）「觀心」は、初期の禪宗における重要な修行法であり、『金剛般若經註』では、この言葉は(159) にも見ることができ、(14) にも「次第遊觀心道經行之處」という表現がある。また、『觀世音經讃』でも、「觀心常居法性」(五)、「從地踊出者。是觀心所經遊處。觀心一定。智惠二心。名曰二佛」(十八) と見える。

(121) 如來爲發大乘者説。爲發最上乘者説。

(1)如是二心先心難。是故我禮初發心。初發(2)心即爲天人師。勝出聲聞及緣覺。故名爲大。斯及(3)無爲大道。十方諸佛成正覺處。故言最上乘也。

（1）以下の四句は『涅槃經』の引用である。(42) の註（1）を參照。
（2）「心」、P2216になし。
（3）「無爲大道」については、(74) の「無爲即道」という表現も參照。なお、この「無爲大道」という言葉は、『觀世音經讃』(十五) にも「無爲大道。自然虛通」と見える。

(122) 若有人能受持讀誦廣爲人説。如來悉知是人。悉見是人。皆(1)得成就不可(2)量無有邊不可思議功德。

十方諸佛。同共一法身。(3)前心既成聖了知。(3)後念(4)即坐道場。故言如來悉知是人。得道人。見之言證。證實相理。故言悉見是(5)人。

（1）「得」、S2511になし。
（2）「量」の下、P2216・『金剛般若經』は「不可稱」あり。P2216は「是人皆得成就不可量不可稱無有」を小振りに書いており、「不可稱」が後補であることを窺わせる。恐らく早くに、この三字を脱したのであろう。今、しばらく現況に從っておく。これと同樣の例は (144) にも見える。
（3）「前心－後念」については、(8) の註（3）を參照。
（4）「即坐道場」については、(118) の註（6）を參照。
（5）「人」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(123) 如是人等則爲荷擔如(1)來阿耨多羅三藐三菩提。

如是之人。是能觀之人。(2)與理相應。堪任荷負菩提重(3)擔。

（1）「來」、P2216は破損。
（2）「與－相應」は、(9) の註（3）を參照。
（3）「擔」の下、P2216は「也」あり。

(124) 何以故。須菩提。若樂小法者。着我見人見衆生見壽者見。則於此經。不能聽受讀誦爲人解説。

(1)偏觀失念。(2)與大乘心不相應。故言不爲解説也。

（1）「偏觀」は、(62) の註（1）を參照。
（2）「與－相應」は、（9）の註（3）を參照。

(125) 須菩提。在在處處。若有此經。一切(1)世間天人阿脩羅所應供養。當知。此處則爲是塔。皆應恭敬作禮圍(2)遶。以諸華香而散其處。

行人證實相理名塔。(3)順理名恭。妄心不起名敬。三空圍遶。外塵不入。内心清淨。萬行心花。一念開發。從心樹生。無生之香。遍散法界。供養於佛。故言而散其(4)處。

（1）「世間」、S2511になし
（2）「遶」、『金剛般若經』は「繞」に作る。
（3）こことほぼ同じ解釋が (28) にもある。
（4）「處」の下、P2216には「也」あり。

(126) 復次。須菩提。善男子善女人。受持讀誦此經。若爲人輕賤。是人先世罪業應墮惡道。以今世人輕賤故。先世罪業(1)即爲消滅。當得阿耨多羅三藐三菩提。

行人雖行波若。(2)無方便慧。不會聖理。起於煩惱。輕賤波若。應墮惡(3)道。今世人即是學大乘心者。雖輕煩惱。(4)了煩惱性。即是菩提(5)也。

（1）「即」、『金剛般若經』は「則」に作る。
（2）『維摩經』に次のようにいうのに基づく。

「何謂縛何謂解。貪著禪味。是菩薩縛。以方便生。是菩薩解。又無方便慧縛。有方便慧解。無慧方便縛。有慧方便解。何謂無方便慧縛。謂菩薩以愛見心。莊嚴佛土。成就衆生。於空無相無作法中。而自調伏。是名無方便慧縛。何謂有方便慧解。謂不以愛見心。莊嚴佛土。成就衆生。於空無相無作法中。以自調伏。而不疲厭。是名有方便慧解。何謂無慧方便縛。謂菩薩住貪欲瞋恚邪見等諸煩惱。而植衆德本。是名無慧方便縛。何謂有慧方便解。謂離諸貪欲瞋恚邪見等諸煩惱。而植衆德本。廻向阿耨多羅三藐三菩提。是名有慧方便解。」(545中)

この言葉は、初期の禪宗で重視されたらしく、『大乘無生方便門』などで、しばしば取り上げられている。今、問題の「無方便慧縛」に關する部分のみ掲げれば、以下の通りである（『大乘五方便北宗』〈197頁〉にも、同樣の文章がある）。

「問。維摩經云。無方便慧縛。[答。]二乘人在定不聞。出定即聞。在定無慧。不能説法。亦不能度衆生。出定心散。説法無定水潤。名乾慧定。是名無方便慧縛。」(178頁)
「何謂無方便慧縛。菩薩以愛見心莊嚴佛土。成就衆生。於空無明無作法中。而自調伏。是名無方便慧縛。」(179頁)
「無方便慧縛。謂菩薩住諸貪欲嗔恚邪見等諸煩惱。而植衆德本。證得六根不動。了貪嗔癡性空。見空取空爲證。厭生死住涅槃。是菩薩[住]貪欲。嗔恚邪見等諸煩惱。而殖衆德本。有聲無聲聲落謝不聞。不聞是名無方便慧縛。」(180頁)

その他、『心王經』の「無方便慧。實際爲家」に對する惠辯の註釋（『心王經註』）に次のようにいうのも參照すべきである。

「不識生死涅槃皆是虚空幻化。是無方便慧。經曰。有慧方便解。無慧方便縛也。」(263-264頁)

（3）「道」の下、P2216は「以」の書き込みあり。

（4）「了煩惱性」、P2216は「性了煩惱」に作る。「性」は後の書き込みで、脱落した文字を補ったものであるが、「了煩惱」の下に補うべきを誤って「輕煩惱」の下に補ってしまったものと認められる。
（5）「也」、P2216になし。

（127）須菩提。我念過去無量阿僧祇劫。於然燈佛前。得値八百四千萬億那由他諸佛。悉皆供養承事。無空過者。

行人一念發於空慧(1)。名爲然燈。了達八百四千萬億法門。名爲諸佛。悉皆供養承事。無空過者。承事(2)身内佛也(3)。

（1）「慧」、S2511・P2216は「惠」に作る。
（2）「事」の下、P2216は「心」あり。
（3）「也」、P2216になし。

（128）若復有人。於後末世。能受持讀誦此經。所得功德。於我所供養諸佛功德。百分不及一。千萬億分(1)。乃至算數譬喩所不能及。

前雖値佛。猶有所得。於後。只是後念。觀時轉(2)深。智慧無盡。比前功德。不及(3)今時一分。

（1）「分」、S2511になし。
（2）「轉深」という言葉については、（84）の註（2）を參照。
（3）「及」、S2511になし。

（129）須菩提。若善男子善女人。於後末世。有受持讀誦此經。所得功德。我若具説者。或有人聞。心則狂亂。狐疑不信。須菩提。當知。是經義不可思議。果報亦不可思議。

智惠(1)猛利曰男。數數(2)集觀。發無生(3)智曰女。衆生六識閉塞。猶如醉人。善知識示語。汝心悟解。即是如來。都不生(4)信。故言心則狂(5)亂。無句義是菩薩句義。故言果報不可思議(6)。

（1）「惠」、P2216は「慧」に作る。
（2）同樣の表現としては、（88）の「女是數數習觀。生七無漏智實也」がある。
（3）「生」、P2216は「上」に作る。
（4）「生」、P2216になし。
（5）「狂」、S2511は「任」に作る。
（6）「議」の下、S2511・P2216は「也」あり。

（130）爾時。須菩提白佛言。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。

行人靜亂不生。心心寂滅。重練身心。取其究竟圓淨。降伏心魔。魔即佛心。通乎大道也(1)。

（1）「也」、P2216になし。

(131) 佛告須菩提。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提(1)心者。當生如是心。我應滅度一切衆生。滅度一切衆生已。而無有一衆生實滅度者。何以(2)故。若菩薩有我相人相衆生相壽者相。則非菩薩。所以者何。須菩提。實無有法發阿耨多羅三藐三菩提者。

(3)煩惱名衆生。煩惱之性。本自不生。何所論滅。本自不有。何所論無。若有我相。(4)則有虛妄衆生。既無我人。誰取滅度。故言實無發三菩提(5)。

（1）「心」、『金剛般若經』になし。
（2）「故」の下、『金剛般若經』には「須菩提」あり。
（3）この表現については、(52) の註（1）を參照。
（4）「則」、P2216は「即」に作る。
（5）「提」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(132) 須菩提。於意云何。如來於然燈佛所。有法得阿耨多羅三藐三菩提不。不也。世尊。如我解佛所説義。佛於然燈佛所。無有法得阿耨多羅三藐三菩提。佛言。如是如是。須菩是。實無有法如來得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。若有法如來得阿耨多羅三藐三菩提(1)。然燈佛則不與我授(2)記。汝於來世當得作佛。號釋迦牟尼。以實無有法得阿耨多羅三藐三菩提。是故。然燈佛與我授(2)記作是言。汝於來世當得作佛。號釋迦牟尼。何以故。如來者即諸法如義。

此之爲證。如中無垢淨。無去來。無得不得。若能內(3)照(4)。悉是惠燈。授之言理。記之言實。得實相理。(5)故言授記。若以心分別。一切法(6)邪。不以心分別。一切法(7)正。

（1）「提」の下、『金剛般若經』には「者」あり。
（2）「授」、『金剛般若經』は「受」に作る。
（3）「内照」という言葉は、初期の禪宗でしばしば用いられたものであり、『大乘五方便北宗』の「問。云何内照分明。云何外用自在。答。根本智内照分明。後得智外用自在」（196頁）などに見ることができる。
（4）「照」、底本は「昭」。S2511・P2216によって改めた。
（5）「故言」、S2511になし。
（6）「邪」、S2511は「雅」、P2216は「耶」に作る。
（7）「正」の下、S2511は「也」あり。

(133) 若有人言。如來得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。實無有法佛得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。如來所得阿耨多羅三藐三菩提。於(1)是中無實無虛。是故。如來説一切法皆是佛法。須菩提。所言一切法者。即非一切法。是故名一切法。

無實者。無虛妄之實。無虛者。聖人得道不虛。眼耳鼻舌身意。悉是解脱門。故言一切法皆是佛法也。

（1）「是中無實無虛」、底本になし。「是」という文字が重出することによる寫誤と認められる。S2511・P2216によって補う。

(134) 須菩提。譬如人身長大。須菩提言。世尊。如來説。人身長大則爲非大身(1)。是名大身。

智惠高出。出於三界。名爲長大。智惠光明。無有形相。故言非大身(2)。

（1）「身」、底本になし。注に「故言非大身」ということから見て明らかに寫誤であり、S2511、P2216によって補った。
（2）「身」の下、S2511は「也」あり。

(135) 須菩提。菩薩亦如是。若作是言。我當滅度無量衆生。則不名菩薩(1)。何以故。須菩提。實無有法名爲菩薩。是故。佛説一切法無我無人無衆生無壽者。

菩薩是能觀之智。煩惱是所觀之境。緣觀俱盡。可謂無心(2)。故言無有法名爲菩薩也(3)。

（1）「菩」、S2511になし。
（2）「無心」については、(48) の註（2）を參照。
（3）「也」、S2511になし。

(136) 須菩提。若菩薩作是言。我當莊嚴佛土。是不名菩薩。何以故。如來説。莊嚴佛土者。即非莊嚴。是名莊嚴。須菩提。若菩薩通達無我法者。如來説名眞是菩薩。

五陰洞達。空無相相(1)。名眞菩薩。心莊嚴色。色(2)莊嚴心。無色無心。即非莊嚴。是名莊嚴(3)。

（1）「相」、S2511・P2216になし。
（2）「色」、底本・S2511になし。明らかな寫誤であるから、P2216によって補った。(98) に「心莊嚴色。有三十二。色莊嚴心。好好無盡。故言即是非相」とあるのを參照。
（3）「嚴」の下、P2216は「也」あり。

(137) 須菩提。於意云何。如來有肉眼不。如是。世尊。如來有肉眼。

見百由旬。一由旬四十里。名(1)字釋如此。今就(1)行人心觀釋云。其肉眼者。謂妄(2)心未淨。神識昏昏。貪愛色聲。故名肉眼(3)。

（1）ここでは「名字釋」、「就行人心觀釋」（「心觀釋」と略稱してよいと思われる）という二通りの解釋法が掲げられているが、續く (138) (140) でも、これが採用されている。こうした二重の解釋は、既に『大乘無生方便門』に、

「問。是沒是出現於世。[答。]五蘊爲世。了空即出現於世。如來王宮生。雙樹滅。即是出現於世。」(184頁)

と見えており、金剛藏菩薩註を參照したことが確實の『法句經疏』では、「外曰」「内曰」という形で現われ、『注觀世音經』は、この「外曰」「内曰」という形式を全面的に採用するに至っている（これについては、拙稿「北宗禪系の『法句經疏』について」を參照）。なお、

「心觀釋」は『大乘五方便北宗』では「譬喩釋」（220頁）、荷澤神會の『南陽和尚問答雜徵義』では「理義釋」（78頁）と呼ばれている。ただし、神會はこれを北宗禪ほどには重視していない。

（2）「安」、あるいは「妄」の誤か。(28)（125）に「妄心不起名敬」と見える。ただし、「安心」という言葉も（21）（79）（91）（138）に見えるので、このままでよいのかも知れない。

（3）「眼」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(138) 須菩提。於意云何。如來有天眼不。如是。世尊。如來有天眼。

恆沙國土。衆生死此生彼。了了知之。名爲天眼。安心息慮。體淨眞明。名天眼也(1)。

（1）「也」、P2216になし。

(139) 須菩提。於意云何。如來有慧眼不。如是。世尊。如來有慧眼。

慧眼清淨。了知世間。知出世間。照通無礙。故名慧眼(1)。

（1）「眼」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(140) 須菩提。於意云何。如來有法眼不。如是。世尊。如來有法眼。

法眼知是人行空無相無作解脫門。法眼者。心體明淨。無諸善惡。心無偏(1)念。了了分明。故言法眼(2)。

（1）「偏念」については、(62）の註（1）を參照。

（2）「眼」の下、P2216は「也」あり。

(141) 須菩提。於意云何。如來有佛眼不。如是。世尊。如來有佛眼。

四眼爲因。佛眼爲果。五眼具足。成於菩提。三界衆生。而作父母。佛眼名用自在。無憎無愛。故言佛眼。雖(1)名五眼。還是一眼(2)。

（1）「雖」、S2511は「難」に作る。

（2）「眼」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(142) 須菩提。於意云何。恆河中所有沙。佛説是沙不。如是。世尊。如來説是沙。須菩提。於意云何。如一恆河中所有沙。有如是等恆河。是諸恆河所有沙數佛世界。如是寧爲多不。甚多。世尊。佛告須菩提。爾所國土中。所有衆生。若干種心。如來悉知。何以故。如來説。諸心皆爲非心。是(1)名爲心。所以者何。須菩提。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。

五(2)陰爲國土。土之言心。所有心數。皆名衆生。行人心不與(3)波若相應。皆爲非心。若與波若相應。是名(4)爲心。別解如此。惣釋。三世心俱不可得也(5)。

（1）「是名爲心」、S2511になし。

（2）『觀世音經讚』（十四）に「身爲國。土之言心」とあるのを參照。なお、「土之言心」は、(83）に既出である。

（3）「與－相應」は、（9）の註（3）を參照。
（4）「名爲」、P2216は「爲名」に作る。
（5）「也」、P2216になし。

（143）須菩提。於意云何。若有人滿三千大千世界七寶。以用布施。是人以是因緣得福多不。如是。世尊。此人以是因緣得福甚多。須菩提。若福德有實。如來不説得福德多。以福德無故。如來説得福德多。

福是無相之福。德是萬行之德。從因緣生。體無自性。無自性(1)故空。空能容受萬法。故云福德多耳。

（1）「性」の下、底本は「無自性」あり。寫誤による重複と考えられる。S2511・P2216によって削った。

（144）須菩提。於意云何。佛可以具足色身見不。不也。世尊。如來不應(1)以色身見。何以故。如來説。具足色身即非具足色身。是名具(2)足色身。

如是(3)觀身實相。觀佛亦然。定惠不(4)慧。(4)慧定不定。即非具足色身。(5)定(6)慧雙照。是名具足色身。

（1）「以」の下、P2216・『金剛般若經』には「具足」あり。P2216は「以具足色」を他より小振りに書いており、「具足」の二字が後の補訂であることを窺わしめる。恐らく、早くにこれを脱したのであろう。今、しばらく現況に從っておく。なお、（122）の註（2）も參照。
（2）「足色」、S2511は破損。
（3）既述のごとく、「觀身實相觀佛亦然」は『維摩經』に基づく。（102）の註（2）を參照。
（4）「慧」、P2216は「惠」に作る。
（5）「定慧雙照」という言葉は、『心王經註』に「禪定名根。智慧爲力。定慧雙照。惱熱消亡也」（298頁）と見える。また、『大乘五方便北宗』に「二乘有定無慧。有慧無定。所不能及。菩薩摩訶薩。定慧雙等。所以能到」（218頁）というのも參照。
（6）「慧」、S2511・P2216は「惠」に作る。

（145）須菩提。於意云何。如來可以具足諸相見不。不也。世尊。如來不應以具足諸相見。何以故。如來説。諸相具足即非具足。是名諸相具足。

自證實理。性相分明。是名具足。諸法性(1)遍在身心。(2)而諸衆生不取不悟。(3)視父而已。玲跰辛苦。故言即非具足(4)也。

（1）「遍」、S2511・P2216は「通」に作る。
（2）「而」、P2216になし。
（3）『法華經』「譬喩品第三」の「父雖憐愍善言誘喩。而諸子等。樂著嬉戲不肯信受。不驚不畏了無出心。亦復不知何者是火何者是舍。云何爲失。但東西走戲視父而已」（12下）による言葉。
（4）「也」、P2216になし。

（146）須菩提。汝勿謂如來作是念。我當有所説法。莫作是念。何以故。若

人言如來有所説法。即爲[1]謗佛。不能解我所説故。須菩提。説法者。無法可説。是名説法[2]。

身心[3]之法。法性本空。空説無説。性空無説。説無[4]所説。故言是名説法[5]。

（1）「爲」、S2511は破損。
（2）「法」の下、現行本の『金剛般若經』には、靈幽法師が長慶二年（822）に菩提流支譯から加えたとされる以下の經文が存在する。
「爾時。慧命須菩提白佛言。世尊。頗有衆生。於未來世。聞説是法。生信心不。佛言。須菩提。彼非衆生。非不衆生。何以故。須菩提。衆生衆生者。如來説非衆生。是名衆生。」（751下）
なお、8世紀後半に成立し、慧能に歸された『金剛經解義』でも、この經文に對する註釋は傳わっていない（455頁）。
（3）「心之」、P2216は「之言」に作る。
（4）「無」の下、P2216は「法」あり。
（5）「法」の下、P2216は「也」あり。

（147）須菩提白佛言。世尊。佛得阿耨多羅三藐三菩提。爲無所得耶[1]。如是如是。須菩提。我於阿耨多羅三藐三菩提。乃至無有少法可得。是名阿耨多羅三藐三菩提。

五受陰除。畢竟空寂。是中清淨。無我人法。即是道也。是名菩提[2]也。

（1）「耶」、P2216は「邪」に作る。
（2）「提」、P2216は「薩」に作る。

（148）復次。須菩提。是法平等。無有高下。是名阿耨多羅三藐三菩提。

不以空分別色受想[1]行識。不以色受想[1]分別空。空即是色受想[2]行識。色受想行識即是空。空平等空。故言是法平等[3]。

（1）「想」、S2511・P2216は「相」に作る。
（2）「想」、S2511は「相」に作る。
（3）「等」の下、P2216は「也」あり。

（149）以無我無人無衆生無壽者。脩一切善法。則得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。所言善法者。如來説非善法。是名善法。

斯乃是心無所行。無所不行。行一切法。皆如來法。故言脩一切善法[1]也。

（1）「也」、S2511・P2216になし。

（150）須菩提。若三千大千世界中。所有諸須彌山王。如是等七寶聚。有人持用布施。若人以此般若波羅蜜經。乃至四句偈等。受持讀[1]誦爲他人説。於前福德。百分不及一。百千萬億分。乃至[2]算數譬喩所不能[3]及。

行人用觀。心心相次(4)。轉深轉妙(5)。擧三千大千世界。如須彌山七寶布施。不及一念無生正觀。與理相應(6)也(7)。

（1）「讀誦」、底本になし。脱落と考えられるから、S2511・P2216・『金剛般若經』によって補った。
（2）「至」、S2511になし。
（3）「能」、S2511になし。
（4）「次」、底本・S2511・P2216とも「以」に作るが、寫誤と見て改めた。(16) に「觀行之人。心心相次」、(32) に「學心之人。心心相次。無雜念起」などというのを參照。
（5）「轉深轉妙」は、『觀世音經讚』（十六）にも「行人重巡前觀心地。轉深轉妙」と見える。なお、「轉深」については、(84) の註（2）を參照。「轉妙」も「轉勝」(53) や「轉明」(101) と合わせ考えるべきものである。
（6）「與－相應」は、（9）の註（3）を參照。
（7）「也」、P2216になし。

(151) 須菩提。於意云何。汝等勿謂如來作是念。我當度衆生。須菩提。莫作是念。何以故。實無有衆生如來度者。若有衆生如來度者。如來則有我人衆生壽者(1)。須菩提。如來説。有我者則非有我。而凡夫之人。以爲有我。須菩提。凡夫者。如來説則非凡夫。

煩惱衆生(2)。自性本離。有何所度。心病眼華。以爲有我。悟解之人。則非有我(3)。

（1）「者」の下、S2511は「者」あり。
（2）「煩惱衆生。自性本離」という表現については、(52) の註（1）（2）を參照。
（3）「我」の下、S2511は「也」あり。

(152) 須菩提。於意云何。可以三十二相觀如來不。須菩提言。如是如是。以三十二相觀如來。佛言。須菩提。若以三十二相觀如來者。轉輪聖王即(1)是如來。須菩提白佛言。世尊。如我解佛所説義。不應以三十二相觀如來。爾時。世尊而説偈言。

一相尚無。況三十二(2)。緣見不同。執言有無。亦有亦無。非有非無。絶百非(3)離四句。小乘之人。亦有三十二相。相不明了。故言轉輪王。法身佛。十力無畏。無相之相。

（1）「即」、『金剛般若經』は「則」に作る。
（2）「二」の下、P2216は「相」あり。
（3）「非」、P2216になし。

(153) 若以色見我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來。

法性音聲。不見如來。以不見故。是名眞見。無所見。無所不見。因邪通乎大道。

(154) 須菩提。汝若作是念。如來不(1)以具足相故。得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。莫作是念。如來不以具足相故。得阿耨多羅三藐三菩提。

佛是悟理之人。訶行者須菩提着三十二相見。後還體悟耳[2]。

（1）「不」、底本になし。底本は、この箇所において一字分が塗りつぶされており、一旦、「不」と書いた後、ことさら消したようである。ただ、『金剛般若經』はもちろん、S2511・P2216にもこれがあるので補っておいた。
（2）「耳」の下、S2511・P2216は「也」あり。

(155) 須菩提。汝[1]若作是念。發阿耨多羅三藐三菩提者説諸法斷滅[2]。莫作是念。何以故。發阿耨多羅三藐三菩提[3]者。於法不説斷滅相。

須菩提還得本心。

（1）「汝」、『金剛般若經』になし。
（2）「滅」の下、『金剛般若經』は「相」あり。
（3）「提」の下、『金剛般若經』は「心」あり。

(156) 須菩提。若菩薩以滿恆河沙等世界七寶布施。若復有人知一切法無我。得成於忍。此菩薩勝前菩薩所得功德。何[1]以故。須菩提。以諸菩薩不受福德故。須菩提白佛言。世尊。云何菩薩不受福德。須菩提。菩薩所作福德。不應貪着。是故説不受福德。

若貪福德。還成生死。恆河沙等七寶布施。由有所得。不及無我忍。忍之言智。智來調心。無[2]心可得。即無我人。得成於忍。觀解轉[3]深。故言勝前菩薩也。

（1）「何以故」、『金剛般若經』になし。
（2）「無心」については、(48) の註（2）を參照。
（3）「轉深」という言葉については、(84) の註（2）を參照。

(157) 須菩提。若有人言如來若來若去若坐若臥。是人不解我所説義。何以故。如來者無所從來。亦無所[1]去。故名如來。

來[2]之言會。會實相理。去之言出。出於六道。教化衆生。雖去而身心不動。遍周法界。廣度衆生。本願力故也[3]。

（1）「所」、S2511は「無」に作る。
（2）「來之言會」という表現は (63) に既出である。(63) の註（3）を參照。
（3）「也」、S2511になし。

(158) 須菩提。若善男子善女人。以三千大千世界碎爲微塵。於意云何。是微塵衆。寧爲多不。甚多。世尊。何以故。若是微塵衆實有者。佛則不説是微塵衆。所以者何。佛説。微塵衆則非微塵衆。是名微塵衆。

行人觀智。名金剛慧。照了身相。悉[1]爲微塵。名之爲碎。一塵一佛。出現於世。法[2]華云。微塵菩薩。從地踊出[3]。

（1）「悉」の下、S2511は「皆」あり。
（2）『法華經』「從地踊出品第十五」に「佛説是時。娑婆世界三千大千國土地皆震裂。而於其中有無量千萬億菩薩摩訶薩同時踊出。是諸菩薩身皆金色。三十二相無量光明。先盡在此娑婆世界之下此界虚空中住」（39下-40上）とある。
（3）「出」の下、S2511は「也」あり。

（159）世尊。如來所説三千大千世界。則非世界。是名世界。何以故。若世界實有者(1)。則是一合相。如來説。一合相則非一合相。是名一合相。須菩提。一合相者則是不可説。但凡夫之人。貪着其事。

前觀身相爲微塵所成。觀(2)心巧妙。方便於後(3)。微塵作種種佛事。次觀(4)十八界。六根六塵六識。三種和合。從因緣生。染着内外。則非一合相。不染不着。是名一合相。故言凡夫之人。貪着其事。非行道人也(5)。

（1）「者」、底本になし。寫誤による脱落と見て、S2511・P2216・『金剛般若經』によって補った。
（2）「觀心」については、（120）の註（2）を參照。この「觀心」より「佛事」までの15字、句讀が明らかでない。
（3）「後」の下、S2511は「後」あり。
（4）ここに見るような「十八界」を觀ずる觀法については、（55）の註（2）を參照。
（5）「也」、P2216になし。

（160）須菩提。若人言佛説我見人見衆生見壽者見。須菩提。於意云何。是人解我所説義不。世尊。是人不解如來所説義。何以故。世尊説。我見人見衆生見壽者見。即非我見人見(1)衆生見壽者見。是名我見人見衆生見壽者見(2)。

六塵境界染着。即是我人。若知眼性本空。見心即斷。

（1）「見」、S2511になし。
（2）「見」の下、S2511は「是名我見人見衆生壽者見」あり。

（161）須菩提。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於一切法。應如是知。如是見。如是信解。不生法相。須菩提。所言法相(1)者。如來説即非法相。是名法相。

行人知己身心。本來是道。今始悟解。可謂無量珍寶。不求自得。如是信者。不生法相。即是寶(2)(3)相。

（1）「相」、S2511になし。
（2）「寶」、P2216は「實」に作る。
（3）「相」の下、S2511は「也」あり。

（162）須菩提。若有人以滿無(1)量阿僧祇世界七寶。持(2)用布施。若有善男(3)子善女人。發菩薩心者。持於此經。乃至(4)四句偈等。受持讀誦。爲人演説。其福勝(5)彼。云何爲人演説。不取於相。如如不動。何以(6)故。

譬如入於大海。漸漸轉(7)轉深。智惠高顯。四心不生。名爲四句。善能分別諸法相。於第一義而不能也。

（1）「無」、S2511は破損。
（2）「持」、P2216は「以」に作る。
（3）「男」、S2511は破損。
（4）「至」、S2511は破損。
（5）「勝」、S2511は破損。
（6）P2216は、この「以故」以降を缺く。
（7）「轉深」という言葉については、(84) の註（2）を參照。

(163) (1)一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀。

(2)色空。受(3)想行識空。空不出三界。不住薩婆若。故言知有爲(4)即是實相也。如夢中無實事。謂言有。覺已知無。還自笑。(5)行人亦如是。諸煩惱結。如夢中有。悟道人。覺時乃知無。還自(6)笑。(7)幻心工匠。畫種種色。一切世界中。無法而不造。行人悉了知。(8)一切從轉心。若能如是知。是人見眞佛。泡者。小兒見水泡。愛之(9)而欲取。衆生愛身命。皆亦復如是。影者。照光即現。不照即(10)隱。諸煩惱(11)鄣。遮正見光。我之影由斯而有。身動影亦動。身行(12)影亦行。善惡業亦爾。露者。煩惱霧露。鄣於慧日。心光既發。(13)衆露消除。電者。如人失珠。莫知所在。電光暫發。而還得之。菩(14)提之珠。無明所覆。一念心光。悉皆照了。應作如是觀者。勸(15)導(16)行人。求善知識爲師。菩提分爲朋友。發菩提心爲家。如説(17)脩爲地。一切善根爲親族。諸菩薩爲兄弟(18)也。

（1）「一」、S2511は破損。
（2）「色」、S2511は破損。
（3）「想」、S2511は「相」に作る。
（4）「即是」、S2511は破損。
（5）「行人」、S2511は破損。
（6）「笑幻」、S2511は破損。
（7）『華嚴經』に「心如工畫師。畫種種五陰。一切世界中。無法而不造」（465下）というのに基づく語。
（8）「一切」、S2511は破損。
（9）「而欲」、S2511は破損。
（10）「隱諸」、S2511は破損。
（11）「鄣」、S2511は「部」に作る。
（12）「影亦」、S2511は破損。
（13）「衆露」、S2511は破損。
（14）「提之」、S2511は破損。
（15）「導」、S2511は「道」に作る。
（16）「行人」、S2511は破損。
（17）「脩」、S2511は破損。
（18）「也」、S2511になし。

(164) (1)佛説是經已。

(2)説之言開。開之言解。(3)心開意解。故言佛説。行人覺悟。無非是法。名之爲經也。

（1）「佛」、S2511は破損。
（2）この解釋については、(44) に「告之言發。發之言開」とあるのを參照。
（3）『觀世音經讚』（七）に「門者開。心開悟解」とあるのを參照。

(165) (1)長老須菩提。

正見能觀之人。(2)與波若相應。尊人重法。故言須菩提。

（1）「長」、S2511は破損。
（2）「與－相應」については、（9）の註（3）を參照。

(166) 及諸比(1)丘比丘尼優婆塞優婆夷。一切世間天人(2)阿脩羅。聞佛所説。皆大歡喜。信受奉行。

(3)此是四衆學心之人。皆得悟道成聖。同心行者。極爲難得(4)也。

（1）「丘比」、S2511は破損。
（2）「阿脩」、S2511は破損。
（3）「此是」、S2511は破損。
（4）「也」、S2511になし。

(167) (1)金剛般若波羅蜜經

(2)大唐(3)天寶元年五月日白鶴觀御注

（1）「金剛」以下、S2511になし。
（2）「大唐」以下、異筆。『金剛般若經』は、これを缺き、それに代わって以下の眞言を附す。
「那謨婆伽跋帝　鉢喇壤　波羅弭多曳　唵伊利底　伊室利　輸盧駄　毘舍耶　毘舍耶　莎婆訶」
（3）天寶元年は、西暦742年に當たる。なお、P2216の背面には、後唐の清泰二年乙未（935）の書き付けがある。

キーワード：北宗禪、金剛藏菩薩註、『金剛般若經註』、『觀世音經讚』、心觀繹